
30 thirty

かしわ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

30 thirty

【Nコード】

N4573J

【作者名】

かしわ

【あらすじ】

愛でもなく、恋でもない、その関係。二人を繋ぐのは、透明で、無機質な、思い。それは、切なく、残酷な心。真白な箱庭で繰り返される、終わりのない物語。

（予告編）

（前書き）

まいど、ありがとうございます。かしわ、です。

こちらは、次回作の予告編です。あまりにも筆が進まないのので、自分を追い込んでみました。。。

なので、短編扱いですが、たぶん、きっと……続きます。

透明で美しいものから
傷つけられたとって

透明で美しいものを
恨んではいけない

透明で美しいものは
傷つける性質のものだから

『透明で美しいもの』 銀色夏生

まろい光が見えた。

明かりは、淡く、朝の光とは、まったく違っていた。

似ているとすれば、プールの底に寝そべって見た空から降る、光の粒だ。水中で乱反射した光は、柔らかく、きらきらと木漏れ日に似た光と変わるのだ。

『……』

音？

いや、これは人の声。

耳に届き、じんわりと馴染んだ頃に、それが『言葉』であることに
気付く。けれど、それが奇妙なのだ。まるで、初めて出会ったこと
のような感覚を覚えた。

一度『言葉』と認識されれば、音の羅列はもう二度と、一音だけの
魅力を得られず、意味をもった塊となってしまう。

『……』

なんだろう、よく知っていた気がする。

まろい光と同じく、思考にもぼんやりと霧がかかっていた。

ああ……どうして私は眠っているのだろう。

……そうか、今、あたしは『眠って』いるんだ……。あたしは、今、目覚めのまどろみの中にいるんだ。

でも、いつ眠ったのだろう……？

そもそも、あたしは……？

きゆうっと、痛みが頭に響く。脳が中心が収縮し、掴みきれない記憶を絞りだそうと頑張っている。

きゆうっ

『……』

きゆうっ

『……』

「……」

……」

……き

『「キ」』

……ゆき

ゆっこ

ゆっちゃん、ゆき、ゆっき、ゆっこちゃん、ゆきちゃん、ゆこ、ゆきこ、ユキコ、由紀子、幸子、有紀子、由貴子……

「雪子!!」

キイイイイイイツツ!!!!!!

突然の、ブレーキ音

舞い降りたのは、漆黒の闇

『ユキコ』

やわやわ、と肩を揺さぶられて、眠りから、引きずり出される。

でも、その感覚は、よく知っているものには思えず、触れあう箇所からは、やんわりとした労わりと躊躇いがしみ漏れて感じ取れた。ううんと、まどろみのまま、寝返りをうつ。

重く、閉じた瞼を、開けようと、力を込めた。

けれど、それはなかなか叶わない。

柔らかな光が瞼をくすぐって目覚めを促すけれど、まるで、生まれてこの方一度も、瞳を開いたことがなかったかのように、瞼は固くその扉を閉ざしていた。

ゆっくり、少しずつ、一ミリ一ミリ、持ち上げる思い扉。

その隙間から差し込む、微かな光は、小さい。なのに、以前テレビで見た、宇宙の日の出を思い出した。

ただの、目覚めとまどろみが、まるで、この世の誕生のように、心を打つのだ。

涙が一滴、まなじりから伝い落ちた。

「ユキコ」

瞬きを一つゆっくりとする。

「あ」

見えたのは、真白な世界と、こちらを見つめて佇む男の人だった。

「言葉は、わかる？」

少しの間をおいて、男性は口を開いた。

『言葉ハ、ワカル』

同じ音を、頭の中で繰り返してから、少しだけ頭を動かして、頷いてみせた。

そうして、見知らぬ彼は、それを確認すると、安心したように、クシャリと顔に皺を寄せて笑った。

その様子は、どこか柴犬に似ていた。

わんこがパタパタ尻尾を振って出迎えてくれているような、無防備で、なにも求めない、笑顔。

「起きてすぐに申し訳ないんだけど、いくつか質問をしたいんだ。

いいかな？」

そんな様子に安心したからか、彼の言う意味をきちんと理解する前に、こくりと頷いていた。

「名前は？」

「……佐藤、雪子……」

仰向けのまま、発する言葉はぐぐもっていて、自分の音には聞こえなかった。

やはり、頭はまだうまく働いてくれず、問われたことに、疑問を感じる間もなく、反射で応えてしまう。

「年齢は？」

「17」

「生年月日を言える？」

「19××ねん、11がつ3か」

「ご家族は？」

かぞく？

なぜか、思考が止まった。

さとつゆきこ

『佐藤雪子』17歳の高校2年生。

脳が告げる情報は、たったそれだけだ。

かぞく、って、何だっけ？

言葉と音だけが、頭の中でぐるぐると回り、その答えは浮かんではこない。

言葉に詰まって、ただ、固まっていると、彼はそれを振り払うかのように、次の質問を投げかけた。

まるで、この質問は、無かったかのように。

尋ねられる質問のほとんどは、ぼんやりと頭の中で漂うだけで、答えを紡ぐことはできなかった。

その度に、自分の中に、靄のかかった景色が浮かび、何とかその正体突き詰めようと、目を細めて探る。

けれど、目を凝らすほどに、その霧は濃くなり、微かに見えていた姿さえも、刹那の内に消え去ってしまっていた。

記憶を辿れない……その失望を感じる間もなく、質問が飛び込む。そのおかげか、心は不思議と軽いままだった。

延々と続く問答は、唐突な質問で終わりを告げた。

「今日は、何年の、何月、何日？」

また、ぐらりと、景色が歪む。それは脳内から引き出した記憶の欠片。

先程までと同じく、諦めを感じつつも、目を凝らして、その姿を見つめた。

ぼやけた視界。それが意外にも、ゆっくりと、カメラのピントを合わすかのように、揺らぎが薄らいで、はっきりとした輪郭を持つていった。

そして、壁に掛けられた、カレンダーが見えた。

「20××年……9月29日、もくようび、です」
呟いた声は、しっとりと空気に溶けた。

静けさが、冷えた空気の室内に舞い降り、奇妙な緊張感が身を包んだ。それまで、淡々と質問を重ねていた彼が、ぴたりと、口を閉ざしてしまっただから。

ついと見上げれば、真白な世界が広がる。

首を巡らせば、そこが窓一つない、全くの密室であると知った。

けれど、部屋には光があふれ、限りある空間には、雪原にも似た無限を感じた。

なんだろう。これは、夢？

唐突な目覚めあけの出来事は、上手く受け入れられなくて、非現実と判断する方が容易い。

なのに、ブレイキ音の響きが、リアルに耳にこびり付いて、胸を騒がせた。

「 うん…… まだ、記憶が不完全なんだね……」

ぼつり、と独り言のような、彼の呟きが耳に届く。

見上げた表情からは、当然なんの情報も読み取れなかった。

のっぺりとしているとも言える、彼の面は、その感情さえも正確に読み取れるのかもわからない。それでも、問うべき疑問も分からないのに、何か答えが欲しくて、視線は彼を捉えていた。

「……ごめんね、説明もなしに、一方的な質問ばかりをして。……」

言い訳すると、君の状態がどの程度か分からなかったから、確認前で闇雲に話をできなかったんだ」

そう言つて、クシヤリと皺をつくり、見せる笑顔はやっぱり、犬に似ていた。

無言で、じいと、見つめてくる視線に照れたのか、口の端をくずして笑みを作り

「ああ、そうだ。自己紹介をしておかないとね。僕は、佐藤チヒロ。ここでの君の“これから”をお世話します」

突然思い立ったように、自己紹介をした。

「君と同じ『佐藤』だから、チヒロって呼んで」

「チヒロ……さん？」

訳が分からないまま、とりあえず口に出して、尋ねてみれば、こくり、と笑顔を見せて、肯定を示した。

ここがどこなのかも、現実かさえも分からないのに、やっと貰った言葉は、なんの答えも示してくれない。

だけど、柴犬みたいな人懐っこい笑みを浮かべる彼がいてくれると、初対面のはずなのに、どうしてだか不思議と家族と一緒にいる時のような、安らぎを感じたのだ。

これが、あたしと、チヒロさんとの、はじまり。

(後書き)

引用文献

銀色夏生 1988 『あの空は夏の中』 角川文庫

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4573j/>

30 thirty

2010年10月9日01時13分発行